

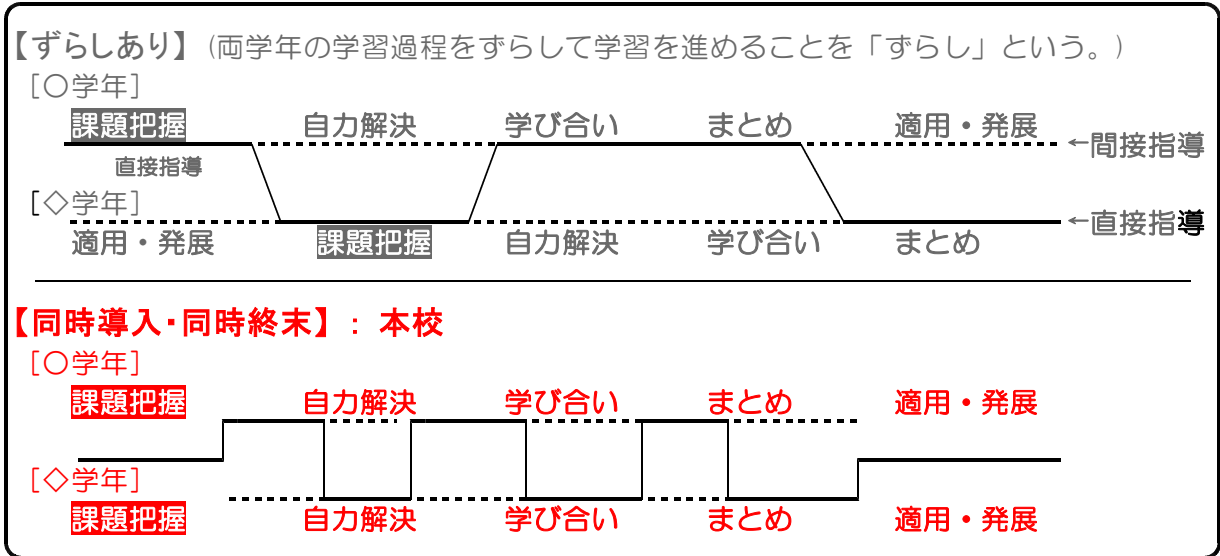
名栗小学校における複式「わたり」の指導

I 複式「わたり」の授業

(1) 複式指導における一単位時間の学習過程

複式学級では2つの学年が同じ教室の中で同時間に同じ教科の学習を行うため、教師が直接指導する「直接指導」、教師の指示のもと児童だけで学習を進めていく「間接指導」を組み合わせて指導することになる。(教師が学年間を移動する動きのことを、「わたり」という。)

複式の算数科における学習過程については、次の2つが代表的である。



本校では、以下の理由から「ずらし」を行わず、「同時導入・同時終末」の学習過程を用いるようにした。

〈「同時導入・同時終末」の学習過程を用いた理由〉

- わたりの複雑にならず、直接指導・間接指導を効果的に行うことができる。
- ずらしありの学習過程だと、教師の指導性が強まってしまうので、子ども一人一人の「自ら学ぶ力」の育成につながりにくい。
- 一単位時間で「自力解決→練り上げ→まとめ→適用・発展」の流れを確保し、本時の学習内容を確実に定着させる。
- 間接指導の時間を、教師が指導できない時間（教師がいないと児童は学習を進められないという発想）というマイナスに捉えるのではなく、児童が主体的に学習を進める時間と捉える。

(2) 本校における「わたり」の捉え方

授業を子どもが主体的に取り組む「学び」の場にするために、複式学級における「わたり」を「子どもにとっての『わたり』」と捉えている。

- 子どもにとって教師が必要だから、直接かかわる。
- 子どもが今、教師を必要としていないから、他方の学年へ行く。

||

どちらの学年も子ども中心で授業を進め、教師は必要な時に指導に入るという指導法
→ 「必要な時」の予測と見極めが重要

学習リーダー（司会係・記録係）が中心となり、児童が主体的に授業を進められる授業づくりを行う。

II 「わたり」の授業で育つ子供

(1) 自主的に学習を進められるようになる。

- ・学習リーダーの司会により、子供たちが中心となって授業を進められる。
- ・学び方を学ぶことにより、本時の授業の流れを見通し、自分で課題を解決していく習慣を身に付けられる。(課題設定・自力解決・自分の考えの発表・比較検討・まとめ・異学年同士の交流…子供たちが中心となってできるようになる。)
- ・子供が主体的に取り組むと・・・
 - ① 圧倒的に話す機会が多い。→堂々と自分の考えを語る子供に。
 - ② 自由に話すことができる。→友達に聞くことができる。
友達に自分の考えを遠慮せず発表することができる。
共に学び合うことができる。

(2) 異学年で学習するので、自らの学習を深めることができる。

- ・自分たちの学習をもう一方の学年に評価してもらえ、喜びを感じることができる。
 - ・下学年…上学年に発表することで学習内容が定着するとともに、評価をしてもらう。
上学年の発表を聞くことにより、次年度への学習意欲が高まる。
 - ・上学年…下学年の目標になったり、自分の学習経験を下学年に伝えることにより、
上学年としての自覚が高まる。
下学年の発表に対して質問や評価をすることで、既習内容への理解を深められる。

III 複式「わたり」の授業を成立させるために

(1) 教材研究(教科の学びを深める)

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が掲げられているが、本校の研究主題である「主体的に学び、共に高め合う児童の育成」は、まさにそのものである。どのようにしたら、児童が主体的に学習に対峙し、仲間との対話を通して深い学びへとつなげていけるのか。授業づくりの「K4の視点」と絡めながら、本校の算数科「わたりの授業」のスタイルの確立を目指していきたい。

(2) 自分の考えを話せる子供の育成

子供一人一人が自分の言葉で語り、友だちの言葉を聴く習慣づくり。子供一人一人が表現できる環境づくり。(朝の時間、国語、道徳、算数、学活など全教科において取り組む。算数科においては、各自の考えをわかりやすく表現できるように指導する。)

(3) 学習リーダーの育成(司会・記録)

- ・児童が5名未満の場合…1名の児童が司会記録を行う。
- ・児童が5名以上の場合…司会係1名、記録係1名

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○学習リーダーは、児童全員に経験させることが望ましい。(しかし、これはクラスの実態に依る)○ローテーションを組んでの毎時間交代制、単元ごとの交代制などいろいろな取り組みがある。(学習過程の段階において、できるところを担当させるという方法もある)学級の実態に応じて取り組み方を考える。○授業前に、学習リーダーとの打ち合わせの時間を持つ。 |
|---|

(4)「わたりの授業」での教師の具体的な支援・配慮

＜児童に課題を設定させる＞

- ・本時の問題を既習内容との弁別を図り、課題を設定させる。
※既習事項や前時までの学習と比較させることを通して、できるだけ児童の言葉で導き出したい。この課題設定の活動で、児童はまとめを意識し、話し合いを通して一文にまとめていくことになる。この活動をすることで、児童はゴールが明確になるだけでなく、問題の条件を読み取ったり、解決策に触れたりもするので、見通しが持てるようになるのである。

＜ゴールと見通しを明確にした授業づくり＞

- ・教師自身、どのようにまとめるか、「ゴールを明確にしてから課題を考える」という逆算の視点で教材研究をする。
- ・実際の授業においては、児童が課題を設定する際にまとめの見通しも同時に行い、この時点でまとめのリード文（書き出しの文）の言葉を書かせることで、児童にゴールをはっきりと意識させる。
- ・自力解決に入る前に、課題を解決するための「見通し」を全員で確認する。
教師は、どんな見通しが立つとよいか把握しておき、不十分なときは補助発問をすることで、確実な「見通し」を持たせられるようにする。
「見通し」を共有することで、全員が同じスタートラインに立ち、どの児童も自力解決に自信を持って取り組めるようになる。

＜各自考え方を明確にした発表の仕方＞

- ・自力解決の際に、図・表・数直線や式・言葉を使って、考えを分かりやすく発表ボード（発表用紙）にまとめさせる。
- ・各自の考え方を発表する際、まず初めに自分がどのような考え方で解いたのかを発表した後、詳しく説明するようにさせる。
例）「ぼくは、0、1をもとにして、数直線を使って考えました。……」
- ・自分の考え方を発表させるだけでなく、発表ボード（発表用紙）を見ている他の児童に考えを読み取らせ発表させることも必要である。

＜キーワードの記録＞

- ・自力解決の後、各自の考えを発表させる際に、記録係は、各自の発表を聞きながらキーワードを記録する。
- ・キーワードを話し合いの中で精選していくことにより、児童自らの言葉で「まとめ」をすることができる。
- ・このキーワードは、比較検討段階で焦点化され、「まとめ」へと直結される。

＜既習を活かす工夫＞

- ・単元の初めに前学年までの内容を簡単に振り返っておく。（レディネスも含む。）
- ・前学年の教科書の活用
- ・算数コーナーの活用…前時までの学習内容を整理して掲示するコーナー
年間を通して各単元の内容を系統的に掲示するコーナー

(5) 黒板の配置 「わたり」が効率的に行える配置

